





僕の父は世界でも有名な科学者だ。

…ただ性格は最悪だし、裏では何をしているのか知れたものじゃないという噂もあった。

正直僕も父のことはあまりよく思っていなかった。だが、まさか実の息子まで実験に使うなんて僕は夢にも思っていなかったんだ。

「最悪だ……っ！」

あんた父親としての自覚がないのかよー！」

「クズだクズだと思っていたけど実の息子まで  
実験に利用するなんで……っ」



弱々しく変わった姿で僕はこちらを見上げる  
父を睨みつけた。

精一杯の虚勢だと自覚していたが、この慣れない  
体では、うまく動かせずそれしかできなかったのだ。

そう、僕は実の父に性別を変えられ女の体に  
されてしまっていたのだ。





「まったく、相変わらず口の悪い子だ。  
それに私のことは女の子らしくパパと呼びなさい」

「僕は男だ、誰がそんなふうに呼ぶか！  
この変態野郎！」



「……はあ。仕方のない子だな。  
これは自分の立場を教えるためにもしっかりと  
私が教育してあげないとな」

「いいか？お前の体は。パパを気持ちよくするための  
穴に変わったんだ。そのことをよく自覚しなさい」



父は僕の手を縛り付けると股に顔をうずめ  
生暖かい舌で秘所を舐め上げた。

ぬちゃりとした音を立てながら舌が与えてくる  
甘く痺れるような快感に僕の中の理性は恐怖し  
気づけば声を荒げてしまった。

いちゃ  
ちゅが





「うー！や、やめろよ！僕は男だぞ！」

「まだ理解していないのか？  
もうお前の体は完全に女のものに生まれ変わった  
んだよ」

「その証拠にほら、少し舐めていただけでこんなに  
濡れている。男のモノを受け入れるために生まれて  
きた証拠だ」

いちゃ  
ちゅが





「…っ！」

否定したくても僕の体は父の舌の動きに敏感に  
反応しトロトロと愛液を溢れさせてしまっている。

まるで犬が涎を垂らしながら餌を待つみたいに  
愛液を垂らしヒクヒクと疼いてしまうのだ。

いちゃ  
ちゅが



「口では色々言っても、どっやら」っちは正直  
みたいだな」

父は愛液を掬いテラテラと濡れた指を僕に  
見せつける。

悔しさや羞恥で顔を逸らす僕を楽しそうに  
眺めた後、父は僕を押し倒し後ろから  
ガチガチになった肉棒を膣口に押し付けた。



「ま、待って！父さん本気なの!!  
僕はさっきまで男だったし僕らは親子なんだよ!」

「冗談で息子を女に変えるわけないだろ?  
いい加減に諦めなさい」





焦って止めようとする僕を無視し父さんは  
腰を押し出し、熱くそり立った肉棒を  
僕の中に挿入した。



(…っ！いいやだあ、中に入ってくるう！  
うあ、こんな気持ち悪いのに…っ)

は  
は  
は

ん…♡



父のモノが内側を押し広げるように入ってくると同時に嫌悪感と一緒にゾクゾクとしたものが背筋を走る。

僕の体は自分の意志とは無関係にトロトロに濡れ父を受け入れてしまっていた。





「あ…っ♡はあっ♡ん…っ♡はあ…っ♡」

「まったく散々嫌がっていたくせにチンコ入れた  
だけでこんな発情するなんていやらしいおまんこ  
だなお前のはっ」

「ち、ちがっ♡これは…っ♡ん、ん…っ♡」

じゅぽ♡  
じゅぽ♡

はっ♡  
はっ♡

ん…♡  
ん…♡





痛みと嫌悪感があるはずなのに体から与えられる  
未知の快感に僕は甘い吐息を漏らしてしまう。  
いやらしく男を誘うような艶声。  
止めようにも父から与えられる肉棒の快感に  
押し流されてしまいそうになる。

はっ  
はっ  
はっ

んっ  
んっ  
んっ

「お、おおおお！女になりたての娘マンコ  
気持ちよくて腰が止まらないぞ！」

「父親を尊敬できない悪ガキマンコはこれから  
パパがしっかりと躡けてやるからな！」





パンパンと肌がぶつかり合う乾いた音と  
お互いの荒い息と声が部屋を満たす。

まるで理性のない獣のように父さんはさらに  
激しく腰をぶつけてきた。

あぐっ

はっ  
はっ  
はっ

んっ  
んっ  
んっ

はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ  
はっ





(う、あ♥動物みたいに父親に犯されているのに  
僕気持ちよくなってるっ♥—いつ本気で僕のこと堕とすきだ)

(ひうつ♥いま、中でビクンって膨らんだあ  
出す気なんだ僕の中に父さんの汚い精子を……)

(い、いやだあ、父さんの精子なんて  
中に入れたくないっ!入れたくないのに  
体が勝手に反応してキュンキュン締め付けてるっ)









僕の懇願も虚しく、父は肉棒を奥まで押し込むと子宮口をグリグリと押しつぶしながら一番奥で射精した。

ドブドブとお腹の奥を温かいものが満たし広がる感覚に不覚にも僕はイってしまった。





「あ、あぁっ♡精液奥でびゆるびゆるって…っ♡  
ん、んっ♡奥ぶつけられて…っ♡」

押し寄せてくる熱く蕩けそうな快感の波に僕の  
意識は溺れてしまった。

ど  
ぶ  
ど  
ぶ  
♡

あ  
ん  
♡

は  
っ  
♡

ん  
っ  
♡

女にされてからの僕は学校も辞めさせられ  
監禁さながらの生活をさせられ毎日父に  
犯され続けた。

避妊なしの中出しを何度されたかなんて  
もう覚えていないほどだ。

すぽ  
すぽ

んっ…♡  
はっ♡  
すっ♡





女の方で大した抵抗もできない僕を好き勝手に  
する父に反感を抱きながらも、僕の思いとは  
裏腹に体は父のモノに順応してしまっていた。

おぼろ  
おぼろ

んっ...♡  
はっ♡  
おぼろ♡



「んっ♡はぁ♡あっ♡う…あぁっ♡」

「はぁ、はぁ♡すいぞ、娘マン♡キュンキュン締め付けてくる！口では嫌がっても本当はパパのチンコ欲しくてたまらないんだな」

「…っ♡誰が、あんたのなんか…っ♡はぁっ♡う…っ♡あぁっ♡」

あぁん♡

んっ♡…♡はぁ♡…♡すいぞ♡





そう強がつて反論する度、奥を何度も打ち付けられ艶やかな声をあげさせられてしまう。

まるで本物の女のような淫らな様。  
僕の体は最早父の思うがままだった。







(クソっ！僕は男のはずなのに、なんでこんなっ♡)

(嫌なのに……っ。嫌なはずなのにっ！  
チンコ欲しくて体が疼いて止まらないっ♡)

(腰が動いて気持ちいいところに勝手に  
押し付けちゃうよお♡)

あぐっ♡

ん……♡は……♡は……♡

「うっ！そろそろ出すぞ！しっかり子宮でパパの  
精液を受け止めるんだぞ！」

「っ……！また中に出す気かよ！  
こんなにしてたら本当に……っ」

「当たり前だろ？お前が妊娠するまでずっと  
中に出し続けるからな」

「ひっ！い、嫌だ！もうやだあ！」

あぐっ♡

はっ♡  
はっ♡





体をひねって逃げようとするも、男である父の力の前では抵抗も虚しく簡単に押さえつけられてしまう。

父はそのまま奥を突くとグリグリと子宮口を押しつぶすように亀頭を押し付け僕の奥へと熱くドロドロとした精液を射精した。

あぐう♡

ぽろぽろ♡

はぁ♡

はぁ♡





「ひあっ♡あ、ああ♡あっついの中に  
びゅるびゅる広がって♡ん、んっ♡」

「う、あ……♡体が勝手にビクビクって  
反応して……♡あっ♡イクの止まらないよお♡」

精液が奥へ叩きつけられるたび自分の体が  
どうしようもないほど女にされてしまったのを  
自覚させられてしまう。

ぐわん♡♡♡

あぐっ♡

ぐわん♡

はっ♡♡♡



父に無理やり犯されるそんな日常の続く中、  
ある日父が汚らしい男を家に連れてきた。

体の汚れもさることながら漂って来る臭いに  
気持ち悪くなり顔を背けてしまう。

だがそんな僕の状態にも構わず男は僕の手首を  
掴むと自分の方に無理やり引き寄せた。





「え…いや、父さんちよつとこの人なに？」

「何って見てわからないのか？」

今日お前を賤げるためにわざわざ来てもらった  
ホームレスさんだ」

「路上生活十年以上でもう何年も風呂にも入って  
いないそうだ」





「ひっ！いい、嫌だ！と、父さん謝るからこんな冗談やめてよう！」

「何度も言っているだろ？私のことはパパと言いなさいって。まったく、そういうところも含めてきつちりと躰けてもらいなさい」



「へへ、本当に好きにしちゃっていいんですね？」

「ああ、構わないよ。避妊薬も飲ませているし好きだけ久しぶりの女の中を味わいなさい」

「ひひ、それじゃあお言葉に甘えて」

「ちよ、まって、何かの冗談だよね父さー」





「んむっ！」

懇願にも近い僕の泣き言が終わるのを待たないで  
目の前の男は無理やり唇を重ねた。

口いっぱい広がる酸っぱさと腐ったような味が  
脳を揺さぶる。

ちゅぽっ





逃げようとするも男は僕の手と肩をがっちり  
押さえつけ離れることもできなかった。

ギトギトの涎を流し込まれながら男の舌が  
僕の舌に絡みつく。



「うめえ、やっぱり若い女の涎は最高だな！」

「んぷっ！ん、んっ！んく、げぼっ！」

嘔吐く僕を無視し男はいやらしい顔を  
浮かべたまま僕の舌を貪る。

あまりの臭さと激しさに酸素が足りず  
頭が段々と朦朧としてしまう。

ちゅぽっ

んぐ





「うぷっ！おっ！ん、んっ！」

何年も洗っていないであろう汚物を無理やり  
喉の奥に叩きつけられる。

吐き気と嘔吐感で気絶しそうになるも  
激しい動きでそれすら許してもらえない。

フーッ  
フーッ





「うづうづ……ん、じゅる……ん、うづうづ、じゅる」

「あ、おおっ！数年ぶりの女のロマン」気持ちいい！」



頭を押さえられ、まるでオナホールでも使うかの  
ように顔を上下に動かされる。

人として見ていないかのような男の扱いに僕の中の  
自尊心が壊されていく。





粘っこいチンカスが口の中でボロボロと零れ  
口いっぱいに酷いえぐみが広がる。

あまりの気持ち悪さに吐き気を催し舌で  
押し返そうとするが、それが気持ちよかった  
のかその行為は男をより一層喜ばせてしまう  
だけだった。





「うっ……お、おっ！」

雌ガキのロマン「気持ちよすぎて腰止まらねえ！」

「こいつオナホの才能ありすぎだろ！」

ぐっ！やべえ、もう出る……っ！全部飲み込めよう！」



「んぐっ……ん、んぐっ……」「ほっ！  
んく、んぐ……」「く、くく……」



ドクドクと粘っこい精液が喉に流される。

全身が総毛立ち、湧き上がってくる嫌悪感に  
離れようとするも無理矢理押さえつけられ  
最後まで喉の奥に出されてしまう。







体はこれから犯されるのを察したのか、  
防衛本能から膣口を愛液で濡らし男を  
受け入れる準備を整えていた。

僕の膣が濡れているのを確認すると男は  
下卑た笑みを浮かべ、その汚らしい肉棒を  
僕の中に挿入した。

あひゃ



「っ♡あ、ああっ♡…はあ♡はあっ♡う、ああ♡」

「ひひ、そんなに俺のちんぽがいいのか？  
あんなに気持ち悪そうにしてたのに、  
とんだビッチだな！」

男は好き勝手なことを言いながら腰をパンパン  
とぶつけてくる。

あぐっ♡

はっ♡  
はっ♡  
はっ♡





心がざわめき全身を悪寒が襲う。  
だが、どんなに嫌がっても体は与えられる  
快楽に勝手に反応してしまう。

僕はただ男を気持ちよくさせる為だけの  
穴にされてしまっていた。

あぐっ♡



はっ♡





「いやだ、いやだ、いやだ！」

「こんな気持ちの悪い相手に玩具みたいに扱われるなんて嫌だっ！」

あーん

あーん

（なんで?!なんで見ているだけで父さんは  
助けてくれないのっ!!）

（無理矢理気持ちよくされてこんなに苦しいのに、  
なんでっ!）

ピシリと自分の心が軋む音が聞こえた気がした。

あーん









部屋のドアが開き誰かが近づいてくる音で  
朦朧としていた意識が覚醒していく。

どのくらいの時間、僕はあの男に玩具にされて  
いたのだろう？全身は気怠く体中からは精液の  
こびり付いた臭いがしてしまっていた。



「……ふむ、すごい有様だな」

「ぽ、ぽ……？」

「ああ、そうだパパだよ。  
やっと素直になってくれたね」

「そんなにホームレスのおじさんとするのが  
良かったのかい？何ならもう一度彼に教育  
を頼もうかい？」

あゝ

その言葉にぞわりとした嫌悪感と拒否感が  
沸き立った。



「あ、あああつ！もう嫌っ！あんな気持ち悪い  
のとしたくないよう！」

僕は必死に媚を売るようにパパに懇願する。  
その姿はプライドなど何もないただの弱い  
メスそのものだった。

あゝ

フッフ...





「……でもパパとするのも嫌なんだろう？  
それならどっちだって良いじゃないか」

「嫌じゃないっ！パパがいいっ！  
僕、パパ以外としたくないよっ」



「ようやく良い子になってくれたな」

「あ……」

汚物だらけで汚い僕の髪を。パパは優しく撫でてくれた。

それだけで先ほどまでの恐怖が消え、心の内が安心と嬉しさで満たされる。



あ……

今までパパに感じていた嫌悪感が嘘のように  
消え、ただ愛おしさだけが残っていた。

これが恐怖から逃げるために無理やり作って  
しまった感情だというのは分かっている。

だが、心が折れてしまった僕はもうこれを  
手放す気にはなれなかった。





「さ、まずはお風呂に入って汚れを落とさなくちやな。パパが隅々まで洗っていつものきれいな姿にしてあげるからな」

「うん♡ありがとっパパ♡……大好き♡」



汚物を流した後、僕はパパと一緒に風呂に  
浸かる。

後ろにパパの存在を感じる、ただそれだけで  
安心と嬉しさが込みあがって来てしまっていた。





「あ……っ♡パパのおちんぽおっきくなつて  
お尻に当たってる♡ふふ♡僕とエッチな  
ことしたいんだ♡」

「ああ、当たり前だろ？良い子にさせる為の教育  
だったとはいえ、私以外に抱かれているところを  
あんなに見せられたんだ」

「本当は嫉妬ですぐにでも抱きたかったよ」



「あはっ♥いいよ♥パパのおちんぽ僕のおまんこ  
でいっぱいヌキヌキして♥」



僕はヒクヒクとうごめく秘所を見せつけ  
パパを誘うように腰を振る。

「ね、頂戴。パパ♡パパのおちんぽで僕の  
オマンコ上書きして、他のこと全部忘れさせて♡」

「ああ、他の男のことなんて。パパが  
全部忘れさせてやる！」

ひく♡

ん♡

は♡  
は♡  
は♡



「んっ♡んんっ♡パパのガチガチおちんぽ  
入ってきたあ♡これっ♡これが欲しかったの♡」

「ん、んんっ♡パパもつと動いてえ♡  
僕の中、パパだけの形にしてえ♡」

「…っ…」



はっ♡  
はっ♡  
はっ♡

あん♡





激しくそれでいて僕の体を気遣うような  
優しい動き。

自分が求められ、ただの穴から人に戻っていく  
かのような感覚に幸福と安心が湧き心を満たす。

おぼろ  
すぼろ

ん、

は、  
は、  
は、



（あつ♥はあつ♥これ、すごい♥動きたびに  
膣内グチュグチュに掻き分けられて…っ♥）

（パパが僕のこと愛してくれているの伝わって  
来る♥ああ♥どうしよう♥嬉しすぎてエッチな  
お汁が止まらないよお♥）

おまんこ  
すぼ

はっ  
はっ  
はっ

あゝん



これが。パパの洗脳のようなやり方だというのは  
本当は分かっている。

でも己を愛してくれている人に抱かれる、  
その嬉しさに他のことなんてどうでも  
よくなってしまう。

おぼろ  
すぼろ

ん、ん、ん

は、は、は

あ、あ、あ





「ああ♥パパ好きい♥もう、ずっとパパとだけ  
エッチするの♥」

「くっ！そんなにおまんこキュンキュン  
締め付けられたらっ！」

おまんこ  
すぼむ

ん、ん、ん

は、は、は

あ、あ、あ



「あはっ♡頂戴♡パパの精子、僕の中に出してえ♡  
僕を。パパだけのお嫁さんにしてえ♡」

「ああ、もちろんだ！  
お前はパパだけのお嫁さん（孕みオナホ）  
にしてあげるからな」

おぼろ  
すぼろ

んっ♡

はっ♡  
はっ♡  
はっ♡

あぁ♡



びゅぶるるっ！

「ひあっ♡パパのあつっいの僕の中に入って…っ♡  
ああっ♡ビュルビュルって出されて中いっぱい  
されてる…っ♡」

びゅるるっ♡♡♡

んっ♡

はっ♡  
はっ♡

あっ♡  
あっ♡





「すきい♥パパ好きなのお…♥」

ドクドクと熱い精液が子宮に広がり僕の中に染み渡る。パパの物にされているというその事実だけで僕は幸福感で何度も絶頂を迎えた。

ん…♥

は…♥  
は…♥  
は…♥

ふふふ  
ふふふ  
ふふふ



「あはっ♡パパのおちんぽ、僕とパパのエッチなお汁でドロドロだぁ♡……ふふ♡いまお口で綺麗にしてあげるね♡」

はっ♡  
はっ♡

んっ♡



「あむっ♡ちゅ、ちゅぷ♡れろ♡じゅる…♡  
じゅるる♡」

「ん、じゅる♡んちゅ、れろ♡パパのおちんぽ  
熱くて舌火傷しちゃうそう♡パパは僕の  
お口気持ちいい？」

は  
は♡♡

ん♡♡





「ああ、娘のロマン」気持ちよすぎて、すぐ  
イっちゃいそうだよ」

「れろっ♡ちゅぶ♡…ふふ♡よかったあ♡  
だったら、もっとしてあげるね♡」

は  
は  
は♡♡

ん♡♡♡



「はあ♥あむ…ちゅぶ、れろ♥  
じゅぶ♥じゅぶ♥」

パパの様子を見ながら口の中で器用に舌を  
這わせ愛撫する。

気持ちよさそうなパパの顔をみていると  
何だか楽しくなってきた。

グー

んっ♥





「ちゅぶ♥…どうしよう、パパのおちんぽ  
しゃぶっていたらエッチな気分になって来ちゃった♥」

「んんっ♥…あむ、ちゅ、ちゅぶ、じゅる♥」

「ちゅ、じゅるっ♥ん、んんっ♥れる、れる♥」

うーん

いゅぽ  
いゅぽ

んっ♥



「っ、もっ出すぞっ……!」

「んぐっ♥いいよ、そのまま出しちゃって  
パパの精液僕のお口に全部頂戴っ♥」

「♥っ……」

はっ  
はっ  
♥

んっ  
♥



「ん、んくっ♡ん……う、うくっ♡」

限界まで高められた肉棒は僕の口の中で、何度か跳ね精液を叩きつける。

限界まで高められた肉棒は僕の口の中で何度か跳ね精液を叩きつける。

まるで自分の物を主張するように。パパの精液は口内を満たしていく。

「ん、んくっ♡ん…んくっ、んくっ♡」

Love you  



「んくっ♡じゅる、んくっ…♡んくっ♡」

「…あは♡パパの精液でお腹いっぱいになっちゃたあ♡」

ん♡♡♡

ん♡♡♡





「…あつ♡パパの熱いのが入って来る♡  
どうしよう僕パパと恋人や夫婦みたいな  
セックスしちゃってる♡」

あつ♡  
♡  
♡

は  
♡  
♡  
♡

あつ♡  
♡  
♡

まるで本当にそうだったかのような感覚に  
僕の興奮は高まっていく。

あの日以来、僕は自分からパパのことを求める  
ようになっていった

んっ♡

はっ♡  
はっ♡

おっ♡  
おっ♡



「んっ♡…んあっ♡あああっ♡ズブズブって  
なか挟られて…っ♡はあ、はあ♡  
そこ、子宮の奥、グリグリされるのいい♡」

「どうしよう♡パパのこと好きなのが  
止まらなくなっちゃうよお♡」

んっ♡

はっ♡  
はっ♡

おっ♡  
おっ♡







すっかりパパの形を覚えてしまった僕の膣肉は  
肉棒にニユルニユルと絡み付き、搾り取るように  
ねっとり締め付けてしまう。

んっ♡

はっ♡  
はっ♡  
はっ♡

おっ♡  
おっ♡  
おっ♡



「んっ♡ぱぱ、僕もう…っ♡」

「ああ、出ずぞ！絶対に私の子を孕ますからな！」

「うん♡パパの、私の中にいっぱい頂戴♡」

ああ♡

は  
っ♡  
っ♡  
っ♡

お母♡  
お母♡



びゅるるるっ！

「ひうつ♡あ、ああ…っ♡お腹の奥に、あつっいの  
いっぱい出てるっ♡卵子、犯されてパパの赤ちゃん  
出来ちゃってる♡」

あゝ

は  
は  
は

ん  
ん  
ん



「えへっ♡パパ好き♡ずっとパパのそばに  
いさせてえ♡ちゅっ♡……ちゅん♡」





パパに甘えるように媚びを売っている僕は  
身も心も女になってしまっていた。

昔の面影はどこにもなく。

知り合いに会っても誰にも気づいてもらえない  
だろう。

…でも、仕方がない。

酷い目にあうくらいならパパに犯されてる  
ほうが良いと思ってしまい、僕は男である  
ことを自分から捨ててしまったのだから。

僕はもう…媚を売ることを覚えた、  
何処にでもいるただの女なのだから。

END



































































































































































































































